

# 木津川市馬場南遺跡が語るもの — 神雄寺と万葉歌木簡 —

## 特別講演

「木津川市馬場南遺跡が語るもの—神雄寺と万葉歌木簡—」

上田正昭

## シンポジウム

「木津川市馬場南遺跡が語るもの」

上田正昭 井上満郎 上原真人 上野 誠 伊野近富

期 日 平成21年8月15日(土)

場 所 向日市民会館ホール

主 催 京 都 府 教 育 委 員 会

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

後 援 木 津 川 市 教 育 委 員 会

向 日 市 教 育 委 員 会

# 次第

挨拶 小池 久（副京都府埋蔵文化財調査研究センター事務局長）

1. 基調報告「馬場南遺跡の調査成果」

伊野近富 P 1 ～ P 10

2. 特別講演「木津川市馬場南遺跡が語るもの——神雄寺と万葉歌木簡——」

上田正昭 頁一～頁七

3. シンポジウム

発表 表 (1) 「万葉歌木簡と万葉集研究」

上野 誠 頁八～十一四

発表 表 (2) 「神雄寺と古代仏教——三彩「山水陶器」の謎を解く——」

上原真人 P 11 ～ P 18

シンポジウム「木津川市馬場南遺跡が語るもの」——神雄寺と万葉歌木簡——

司 会 井上満郎（古代史：当調査研究センター理事・京都産業大学教授）

パネラー 上田正昭（古代史：当調査研究センター理事長・京都大学名誉教授）

上原真人（考古学：当調査研究センター理事・京都大学教授）

上野 誠（国文学：奈良大学教授）

伊野近富（当調査研究センター次席総括調査員）

## 木津川市馬場南遺跡が語るもの

### 「神雄寺と万葉歌木簡」

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長

京都大学名誉教授

上田 正昭

このたびの馬場南遺跡の発掘調査の成果は、いわゆる天平文化の内実に迫る注目すべき多くの問題を提起した。そのシンポジウムは、秘められた謎の解明に大きく寄与するはずである。与えられた「神雄寺と万葉歌木簡」のテーマにそくして、若干の私見を申し述べたい。

平城京の北約5キロの木津糠田に位置する馬場南遺跡は、天神山を背後として、はるかかなたに生駒の山脈を遠望することができる。夕日のかたむくところには、天平の神雄寺（神尾寺）とそのあたりのたずまいがよみがえってくる。

掘立柱建物跡3棟のほか、「本堂」と「礼堂」の存在が推定されているが、この寺跡が、「神雄（尾）寺」跡であったことは、七六〇年

前後からの多数の墨書土器によってたしかめられる。天神山と神雄寺のありようは、この寺が神仏習合を背景とした山寺であったことを推定させる。なお神雄（尾）寺については、亀岡市宮前町宮川の「神尾（カムノオ）寺」や岸和田市神於町の「神於（コウノ）寺」を想起する。

神仏習合の寺としては、福井県越前町の白鳳期の劔御子寺（宝亀四年鐘銘）が古く、靈龜二年（七一六）の越前氣比神宮寺、養老年間（七一七―七二四）の若狭神宮寺、神龜二年（七二五）造立と伝える宇佐八幡の弥勒寺（『日本霊異記』では「大神寺」）などがつづく。かつて伊勢大神宮寺が存在したことは、神護景雲二年（七六八）七月の条（『続日本紀』）に明らかである。

この神尾寺跡からは、二カ所で一万余近くにおよぶ土師器の灯明皿と三彩「山水陶器」・三彩香炉・ガラス管などが出土した。盛大な燃灯供養や法要が行われていたことはたしかである。墨書土器に「大殿」があり、有力貴族とのかかわりをもつ寺であったと思われる。

右大臣（後に左大臣）橘諸兄は「相楽別業」を保有し、天平十二年（七四〇）五月十日には、聖武天皇が行幸して、奈良麻呂に従五位下を授けている（『続日本紀』）。恭仁京遷都の実力者は橘諸兄であった。天平勝宝八年（七五六）二月、橘諸兄は左大臣辞任に追い込まれ、翌年の七月には、橘奈良麻呂・大伴古麻呂らが、藤原仲麻呂殺害の謀議発覚で処刑された。神尾寺は橘氏ゆかりの寺の可能性が強い。橘氏の氏寺としては井手寺跡が有力だが、綴喜郡に属し、有力氏族が二つ寺を持

った例は、中臣氏の中臣寺（『尊卑分脈』）などにもみいだされる。

難波宮跡から「皮留久佐乃皮斯米之刀期」（「春草のはじめの年」白雉元年か）の歌木簡が出土したのを契機として、歌木簡の存在が脚光を浴びているが、明日香村石神遺跡でみつかった「朝なぎにきや（よ）る白波」（『万葉集』第七卷一三九一）の歌木簡は出土状況が不明であるばかりでなく、右から左への刻字であり、甲賀市信楽町宮町遺跡出土の「阿佐加夜麻（安積山）」（『万葉集』第十六卷二（八〇七）の歌木簡は、表に「奈波ツ」（難波津）の歌を書きとどめられていて、習書木簡の万葉歌と思われる。

このたび馬場南遺跡で出土した「阿支波支乃之多波」（秋萩の下葉・『万葉集』第十卷二二〇五）の歌木簡は歌会の歌木簡の可能性が高い。仏前唱歌の例もあって（『万葉集』第六卷一五九四）、その場では「種々の音楽」も奏されている。馬場南遺跡から陶製の鼓がみつまっているのも興味深い。馬場南遺跡の万葉歌木簡は、仏前歌会のありさまや『万葉集』のなりたちに多くの支唆を与える。

(1) 万葉仮名の歌木簡



阿留之良奈你麻久  
阿佐奈伎尔伎也

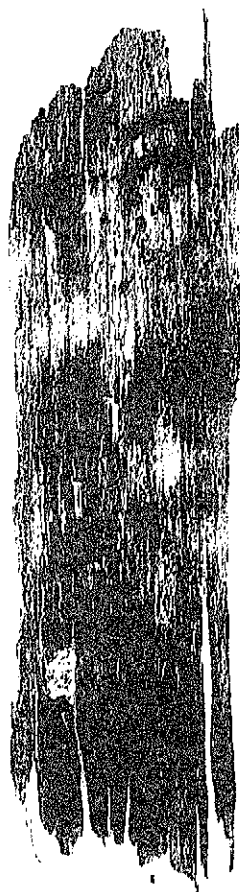
(2)

るしらな(み)にまく  
留之良奈你麻久  
阿佐奈伎尔伎也  
あさなき(よ)にきや

奈良・石神遺跡



(3) 甲賀市信楽町宮町遺跡



阿佐可夜麻加氣佐間美山流夜真  
奈逆波ツ尔佐久夜己能波余布山己母

※太字は判読できた文字  
細字は推定  
写真は滋賀県甲賀市教委提供の赤外線写真

(4) 「古今和歌集」 仮名

なにはづのうたは、みかど

のおほむはじめなり。

おほさゝぎのみかど、なにはづにて、みこときこえける時、東宮をたがひにゆづりて、くらゐにつきたまはで、三とせに

なりにつけり哥也。この花はむめの花をいふなるべし。あさか山のことばは、う

ねめのたはぶれよりよみて、

かづらきのおほきみを、みちのおくへ、つかはした

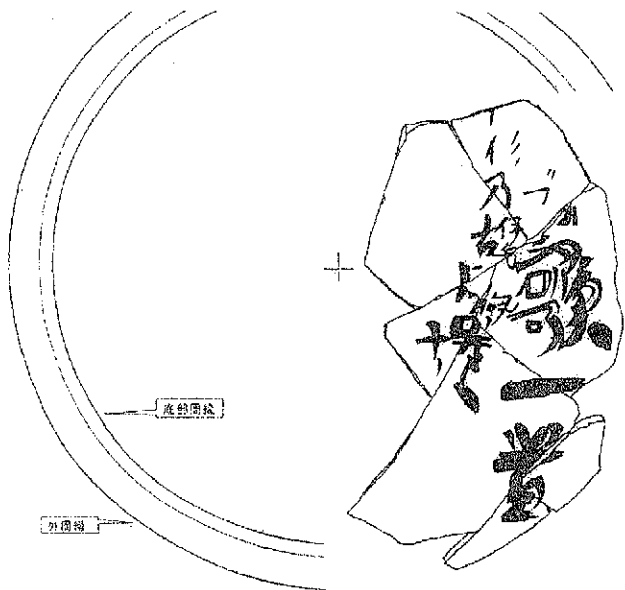
うけなどしたりけれど、すさまじかりければ、うねめなりける女の、か  
はらけとりて、よめるなり。これにぞ、おほきみのこゝろとけにする。このふたうた

は、うたのちゝはゝのやうにてぞ、てならふ人の、はじめにもしける。

そもそも、うたのさま、むつなり。からのうたにも、かくぞあるべ

き。そのむくさのひとつには、そへうた、おほさゝぎのみかどを、そ

へたてまつれるうた、



(7)

あきはきのしたはもみ〔ち〕  
阿支波支乃之多波毛美□

2205

秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ゆけば風をいたみかも

万葉集 第十卷 雑歌・相聞歌



(6) 『万葉集』 卷十六

安積香山 影さへ見ゆる 山の井の 浅き心

を 我が思はなくて

右の歌、伝へて云はく、葛城王 陸奥國

に遣はされける時に、国司の殿前、緩急な

ること氣に甚だし。ここに王の意悦びずし

で、怒りの色面に顕れぬ。飲饌を設けた

れど、肯へて宴樂せず。ここに前の采女あ

り、風流びたる姫子なり。左手に腕を擦け、

右手に水を持ち、玉の膝を擧げて、この歌

を詠む。すなはち王の意解け悦びて、渠飲

すること終日なり、といふ。

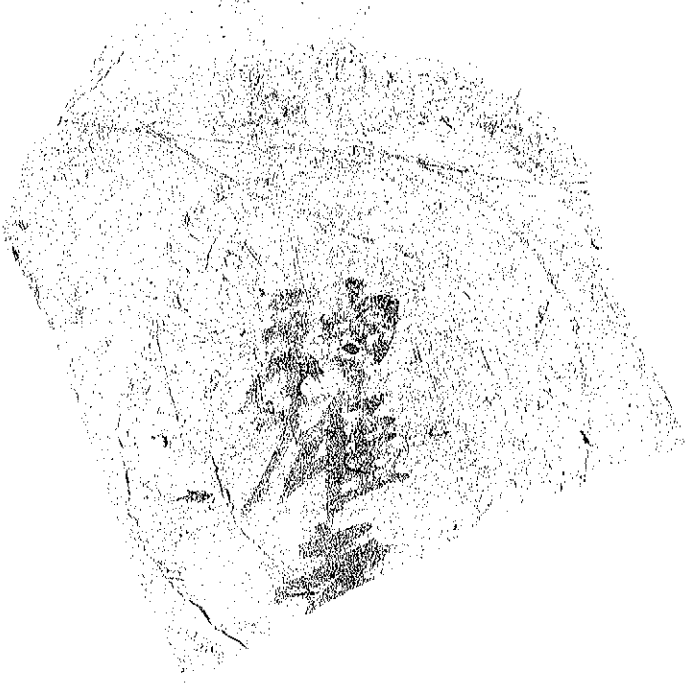
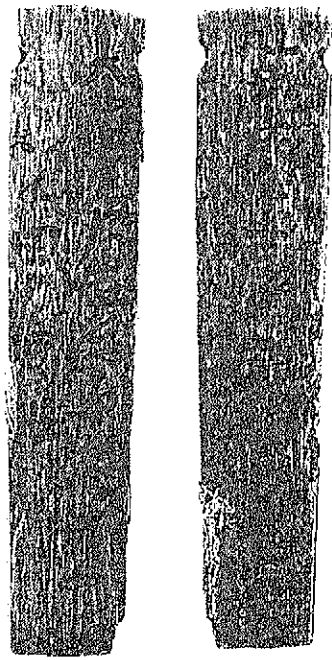
馬場南遺跡 墨書土器一覽表

内容	器種
1 「神雄」 / 「神雄寺」	土師器
2 「神雄寺」	須恵器
3 「神雄寺」	須恵器
4 「神口寺」	土師器
5 「神口寺」	須恵器
6 「神口寺」	須恵器
7 「神雄寺カ」	土師器
8 山口山寺	土師器
9 「神カ尾寺」	須恵器
10 「神雄カ寺」	土師器
11 「神雄」	須恵器
12 「神雄」	須恵器
13 「神雄」	土師器
14 「神雄」	?
15 「神尾」	土師器
16 「神寺/口」	土師器
17 「神寺」	須恵器
18 「神寺」	土師器
19 「神寺」	須恵器
20 「神寺」	須恵器?
21 「神寺」	土師器
22 「神寺」	土師器
23 「神寺」	土師器
24 「神寺」	土師器
25 「神寺カ」	土師器
26 「神寺カ」	土師器
27 「神カ寺」	土師器
28 「口寺」 「栗?」	土師器
29 「神口」	土師器
30 「神口」	土師器
31 「神口」	土師器
32 「神口」	土師器
33 「神口」	土師器
34 「神口」	須恵器

内容	器種
35 「神カ口」	土師器
36 「神カ口」	土師器
37 「神」	須恵器
38 「神」	土師器
39 「神」	土師器
40 「神」	須恵器
41 「神」	土師器
42 「神」	土師器
43 「神」	土師器
44 「神」	土師器
45 「神」	須恵器
46 「神」	須恵器
47 「神」	須恵器
48 「神カ」	土師器
49 「神カ」	須恵器
50 「神カ」	土師器
51 「神カ」	土師器
52 「神カ」	土師器
53 「神カ」	土師器
54 「神カ」	土師器
55 「神カ」	土師器
56 「神カ」	須恵器
57 「寺」	須恵器
58 「寺」	土師器
59 「寺」	須恵器
60 「寺」	須恵器
61 「寺」	土師器
62 「寺」	須恵器
63 「寺」	土師器
64 「寺」	土師器
65 「寺カ」	土師器
66 「寺寺」	須恵器
67 「寺カ」	須恵器
68 「雄カ」	土師器

69 「雄カ」	土師器
70 「雄カ」	土師器
71 「口橋寺」	須恵器
72 「口/口利諾/口」 「口/西口」	須恵器
73 「浄」	土師器
74 絵 (運カ)	土師器
75 絵 (運カ)	土師器
76 絵 (花カ)	土師器
77 「大殿」	土師器
78 「造瓦」	須恵器
79 「黄葉」	須恵器
80 「黄葉」	須恵器
81 「黄」	須恵器
82 「口瓶田」	須恵器
83 「左木」	須恵器
84 「口」	土師器
85 「印カ」	土師器
86 「大」	須恵器
87 「乙」	須恵器
88 「角」	須恵器
89 「北カ」	須恵器
90 「毛」	須恵器
91 「玉口」	須恵器
92 「田」	土師器
93 「中カ」	須恵器
94 「太」	須恵器
95 「本」	須恵器
96 「カ」	須恵器
97 「口」 言カ	須恵器
98 「カ」	須恵器
99 人面墨描	須恵器
100 「悔過」	須恵器

乙丑年銘の木簡  
(これは該の取れた文字)  
乙丑年十二月三野国ム下評  
大山五十戸造ム下部知ツ  
□人田部兒安



## (10) 「続日本紀」 (天平勝宝九年七月二日の条)

多治比鷹主。大伴兒入。自餘衆者闇裏不見其面。庭中禮拜天地四方。共飲鹽汁。誓曰。將以七月二日闔  
 頭發兵圍內相宅。殺劫即圍大殿。退皇太子。次傾皇太后宮。而取鈴璽。即召右大臣將使。号令然後廢  
 帝。簡四王中立以爲君。於是追被告人等。隨來悉禁著。各置別處。一一勘問。始問安宿。歎云。去六  
 月廿九日黃昏。黃文來云。奈良麻呂欲得語言云。尔安宿即從往。至太政官院內。先有廿許人。一人迎來  
 禮揖。近着看顔。是奈良麻呂也。又有素服者一人。熟看此小野東人也。登時衆人共云。時既應過。宜須  
 立拜。安宿問云。未知何拜耶。答云。拜天地而已云。尔安宿雖不知情。隨人立拜。被欺往耳。又問黃文。  
 奈良麻呂。古麻呂。多治比犢養等。辭雖頗異。略皆大同。勅使又問奈良麻呂云。逆謀緣何而起。歎云。內  
 相行政甚多無道。故先發兵。請得其人。後將陳狀。又問政稱無道。謂何等事。歎云。造東大寺。人民  
 苦辛。氏々人等。亦是爲憂。又置剗奈羅爲已大憂。問所稱氏々指何等氏。又造寺元起。自汝父時。今遭  
 人憂。其言不似。於是奈良麻呂辭屈而服。



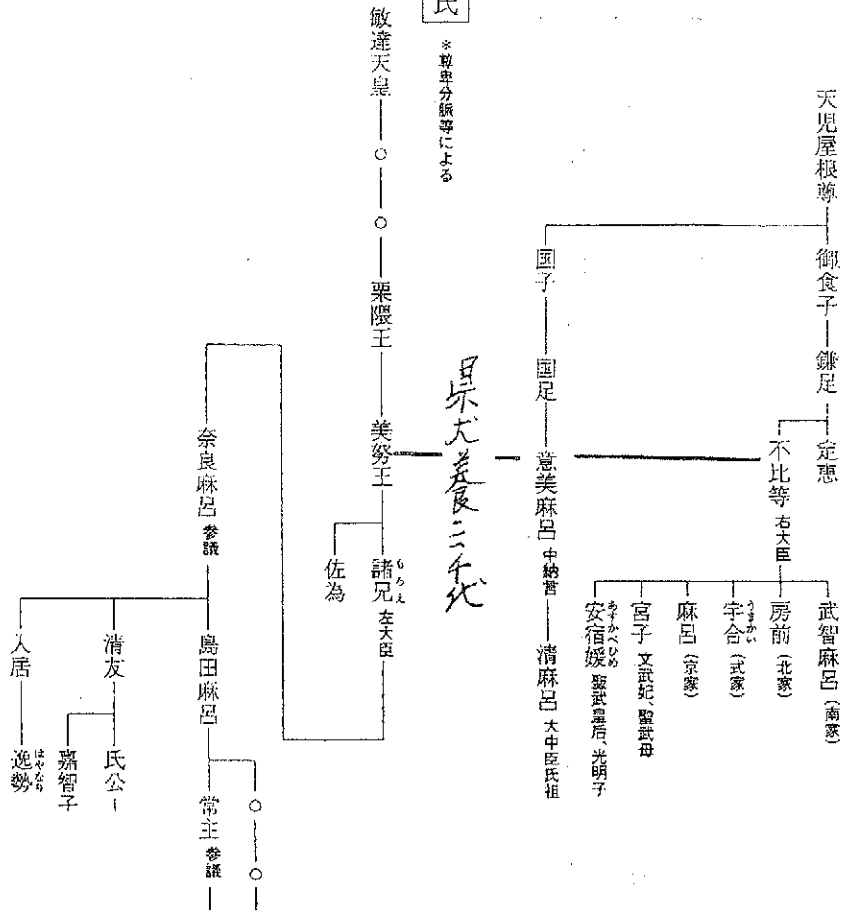
(11) 系譜

藤原氏

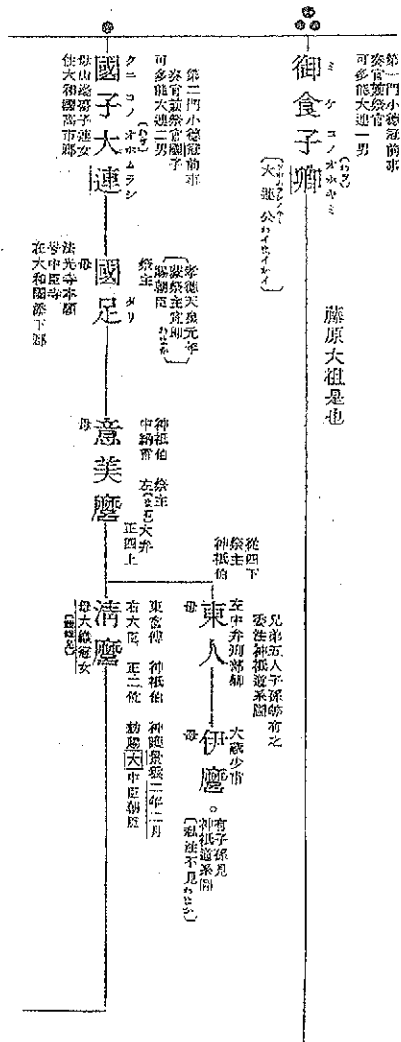
\*尊卑分脈等による

橘氏

\*尊卑分脈等による



(12) 中臣氏 (『尊卑分脈』)



万葉歌木簡と万葉集研究

上野 誠 (奈良大学)

はじめに

あいつぐ歌木簡の発見の中で、二尺一行書き・一字一音の歌木簡／遺物の考古学と遺跡の考古学／寺院跡から出土した歌木簡をどう見るか

一、馬場南遺跡の万葉歌木簡

「阿支波支乃之多波毛美智」 (234)・(24)・12 081  
『馬場南遺跡出土遺物記者発表資料』(京都府埋蔵文化財調査研究センター、二〇〇八年)

秋芽子乃 下葉赤 荒玉乃 月之歴去者 風疾鴨

秋萩の 下葉もみちぬ あらたまの 月の経ぬれば 風を疾

(いた) みかも (巻十の二二〇五)

※京都府木津川市馬場南遺跡(八世紀中ごろ)／「神雄寺」「神尾」

と牛嶺山井／八千枚の灯明皿↓燃灯供養の可能性／仏教儀礼と和歌の場の関係は？・・・

冬十二月の晦(つごもり)に、味経宮(あぢふのみや)に一千百余の僧尼(ほふしあま)を請(ま)せて、一切経を誦ましむ。是の夕(よひ)に、二千七百余の灯(みあかし)を朝庭内(みかどのおほば)に燃(とも)して、安宅(あんたく)・土側(どそく)等の経を誦ましむ。是に天皇(すめらみこと)、大郡(おほこほり)より遷りて、新宮に居(おは)します。母(なづ)けて難波長柄豊碓宮(なにはのながらのとよさきのみや)と曰ふ。

(孝徳天皇白雉二年(六五二)十二月晦条、新編日本古典文学全集『日本書紀③』小学館)

丁亥(ていがい)に、勅して、百官人等(ももつかさのひとら)を川原寺に遣して、燃灯供養す。仍りて、大斎悔過(だいさいくゑくわ)す。

(朱鳥元年(六八六)六月十九日条、新編日本古典文学全集『日本書紀③』小学館)

二、仏前唱歌の伝統

仏教儀礼と和歌

仏前の唱歌一首

しぐれの雨 間なくな降りそ 紅に にほへる山の 散らまく  
惜しも

右、冬十月、皇后宮の維摩講に、終日に大唐・高麗等の種々の音楽を供養し、爾（しか）して乃ちこの歌詞を唱ふ。弹琴（ことひき）は市原王・忍坂王（後に、姓大原真人赤麻呂を賜る）、歌子（うたびと）は田口朝臣家守・河辺朝臣東人・置始連長谷等十数人なり。（巻八の一五九四）

※藤原氏と興福寺と維摩講／皇后の病氣平癒のため、藤原氏とゆかりの深い維摩講を、興福寺でなく皇后宮で行う／「終日」の意味は、結願の日がよい／数日続いた法会の最終日の意味／ケチガンとケイチン（結縛）／「弹琴」と「歌子」・・・皇后宮での演奏と歌唱に堪え得る評価を当時有していたと見るべき／結願日の芸能・・・大唐と高麗の音楽／弹琴と歌によるヤマトウタの唱和／オコナイの伝承・・・伎楽・田楽・田遊び・にはかななどの芸能伝承の機会／南都の鬼追い／出家者・在家者など不特定多数の人間でにぎわう日

河辺朝臣東人の皇后歌の伝誦

朝霧の たなびく田居（たゐ）に 鳴く雁（かり）を 留め得むかも 我がやどの萩

右の一首の歌、吉野の宮に幸しし時に、藤原皇后の作らせらるなり。ただし年月未だ審詳らかならず。

十月五日、河辺朝臣東人が伝誦せるなりと云爾（いふ）。

（巻十九の四二二四）

※皇后の歌を「伝誦する」東人／短歌体一首を定まったりズムや抑揚で歌うことが推定される／覚える能力ではなく歌う能力／どのように歌い得るか／歌の伝誦に対して高い能力を有していたないしはそう評価されていた

置始連長谷の活動、歌の歌い手としての評価

三月十九日に家持が庄の門の榭樹の下にして宴飲する歌二

前

山吹は 撫でつつ生ほさむ ありつつも 君来ましつつ かざしたりけり

右の一首、置始連長谷

我が背子が やどの山吹 咲きてあらば 止まず通はむ いや年のには

右の一首、長谷、花を攀ぢ壺を提りて到来る。これに因りて、大伴宿禰家持この歌を作りて和ふ。

（巻二十の四三〇二・四三〇三）

田植えを前に労働力を確保／魚酒の禁止／歌で人を集めたのではないか／皇后宮で歌うことが許されるほどの名手を「庄」の宴に呼ぶ意味は・・・／パンと見せ物／選挙

推定される歌をめぐる能力

- A 歌を作る能力（作歌能力Ⅱ歌人へ）
- B 歌唱する能力（歌唱力Ⅱ歌手へ）
- C 歌を伝える能力（伝誦能力Ⅱ伝承者へ）
- D 歌を記す能力（Ⅱ筆録者へ）
- E 歌を理解し、批評する能力（Ⅱ批評家へ）

三、河原寺の琴と御齋会

河原寺の仏堂の裏の倭琴に書かれた歌

世間の無常を厭ふ歌二首

生死の 二つの海を 厭（いと）はしみ 潮干（しほひ）の山  
を 偲ひつるかも

世の中の 繁き仮廬（かりほ）に 住み住みて 至らむ国のた  
づき知らずも

右の歌二首、河原寺の仏堂の裏に、倭琴の面に在り。

※「倭琴」が寺院において使用ないし保管されていたことを意味する／仏教と楽と歌の結びつきの古さを示唆する資料となるのではない  
いか

天武天皇の八年忌と無遮大会

天皇の崩りましし後の八年の九月九日、奉為（おほみため）の御齋会の夜に、夢の裏に習ひ賜ふ御歌一首 古歌集の中に出でたり

明日香の 清御原の宮に 天下 知らしめしし やすみしし  
我が大君 高照らす 日の皇子 いかさまに 思ほしめせか  
神風の 伊勢の国は 沖つ藻も なみたる波に 塩気のみ か  
をれる国に うまこり あやにともしき 高照らす 日の皇子

（巻二の一六二）

▼御齋会・・・参集者・僧侶への食物のふるまい／持統七年（六九

三）九月九日は、天武天皇が崩じて八年目に当たる（朱鳥元年〔六八六〕崩御）／伊勢と天武天皇の結びつきを説く

▼『日本書紀』には、この持統七年（六九三）の九月の翌十日、天武天皇のために無遮大会が行われたとある。これは、持統天皇が自

ら主催者となり貴・賤・在家・出家の区別なく法会ののちに供養布施が行われたのであろう。そして、恩赦も行われた。

丙申に、清御原天皇の為に、無遮大会を内裏に設く。繫囚（とらはれびと）は悉く原（ゆる）し遣る。

（持統天皇七年（六九三）九月十日条、新編日本古典文学全集『日本書紀③』小学館）

おわりに

「しぐれの雨 間なくな降りそ 紅に にほへる山の 散らまく惜しも」（巻八の一五九四）と「秋萩の 下葉もみちぬ あらたまの 月の経ぬれば 風を疾（いた）みかも」（巻十の二二〇五）／法会に関する内容を有していない／無理に「無常」を結び付ける必要ない／結願日は多くの人々が、ともに食事をわかちあい、芸を楽しむ日であった／それが、布施に通じるのであって、ことさら歌で「仏法」を説くというような場ではない（歌による布施）／貴賤・僧俗を問わぬ不特定多数の参集／不特定多数の人びとに歌われた歌を示す必要がある・・・二尺一行書き、一字一音式／むしろ、大切なのは季節感ではないのか／参集者も声を出す仕掛け





図7 東大寺誕生仏と灌仏盤

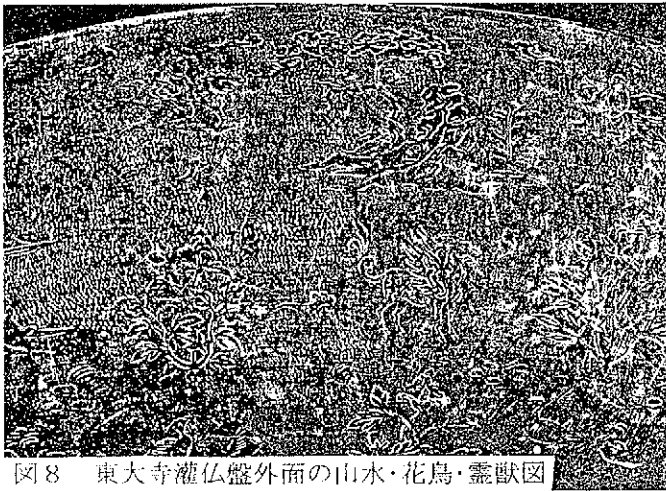


図8 東大寺灌仏盤外面の山水・花鳥・靈獸図

図9 釈迦誕生三場面



〈太安3(472)年銘石造如来座像光背裏面の浮彫〉

御灌佛裝束

金色釋迦佛像一軀。佛金銅山形二基一基立背龍形。一基立赤龍形。金銅多羅一口受水ノ鉢。料。水。黒漆案四脚。一脚踏料。金銅約二柄。安同鉢。料。人給料。黒漆杓二柄。一脚白銅鉢。盤一枚。銀鉢四口。各加輪。並五色水料一脚。花盤二口。盛。西一枚。導師盤一枚。加盛。時花。金銅火爐一口。加盛。一脚散花。第五枚盛時花。右四月八日供備御在所。

史料二 『延喜式』卷第十三 圖書寮

史料一 『西大寺資財流記帳』

史料三 『江家次第』卷第六 八日御灌仏事

佛菩薩像第三

藥師金堂

(中略)

- 金銅釋迦佛像一軀 高七寸五分
- 金銅蓮華座 高二寸五分
- 金銅六角机 方八寸
- 足六隻 高三寸九分
- 埵帝釋像二軀 各高一尺三寸  
在彩色衣蓋一口、
- 埵神王像二軀 彩色
- 金銅多門天王像一軀 高七寸
- 金銅摩耶夫人像一軀 高一尺一寸
- 金銅花樹一根 高三尺五寸
- 金銅龍形一頭 長一尺三寸

已上四種、灌佛調度

八日御灌佛事

四月、若齋院入一番司、有御誕之時、  
八日雖不當神事、止之云々、  
若當神事、停止、當社本當麻大神祭  
等使立日者、或有明日可立仰二獨被  
之行

前一日、内藏寮官人申藏人可請明日御導師由、  
藏人奏聞依仰定之、召第一藏寮成請書進所賜、  
校書殿衆令請之、  
當日早且御浴殿藏人奉仕御裝束、令所衆等垂母  
屋御簾、撤晝御座、返燈樓綱、圖書寮立灌佛臺二  
脚於東廂南第四間、其南北立黒漆机各二脚、東西  
立之、南二脚在第三間之中、南一脚踏置花盤五枚、(入時花)北一  
脚踏置花盤二口、盛時花、重玉記、有火蛇、在中間、散花具無  
置、北二脚在第五間之中、南一脚踏置五色水鉢五口、(大鉢右中  
央爲御料、白銅也、自餘銀鉢、並有輪)北一脚踏置金銅杓二柄、  
(御料在、南)黒漆杓二  
柄、(人給料在、北)  
高僧佛云、四月八日浴佛以都梁香、爲青色水、鬱金香爲赤色  
水、五降香爲白色水、附子香爲黄色水、安息香爲黒色水、以  
灌佛頂、圖書式、金色釋迦一體、金銅盤一枚、重玉記、青龍、北  
山、赤龍、南山、佛在中間、山形二基、一云青龍、一云赤龍、金銅多  
羅一口受、  
水料、

唐 萬 曆 年 百 六 十 間 人 畫 卷	天 之 一 部	中 國 歷 代 畫 卷
宋 徽 宗 年 百 八 間 人 畫 卷	天 之 一 部	一 卷 畫 一 卷 卷
元 朝 年 百 四 間 人 畫 卷	天 之 一 部	各 畫 一 卷 卷
明 朝 年 百 二 間 人 畫 卷	天 之 一 部	各 畫 一 卷 卷

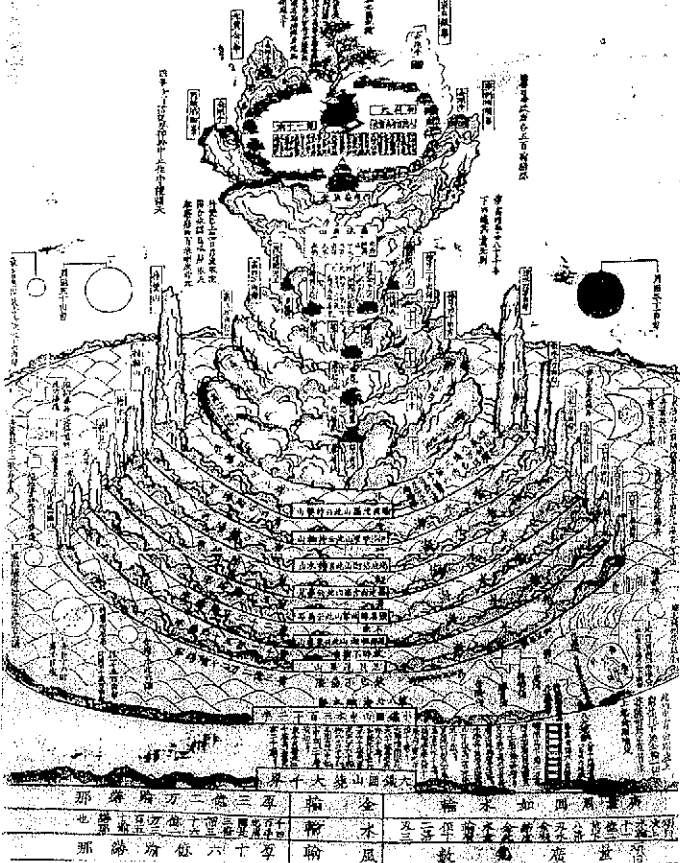


図1 須彌山図(『仏教大辞典』より)

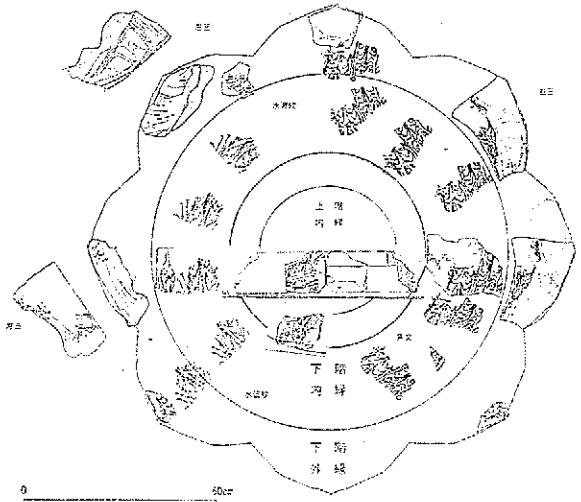


図2 三彩「山水陶器」復元図(伊野案)

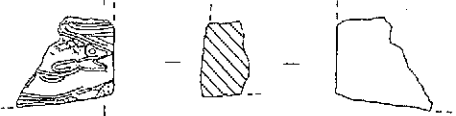


図3 三彩「山水陶器」魚図(府埋文現説資料)

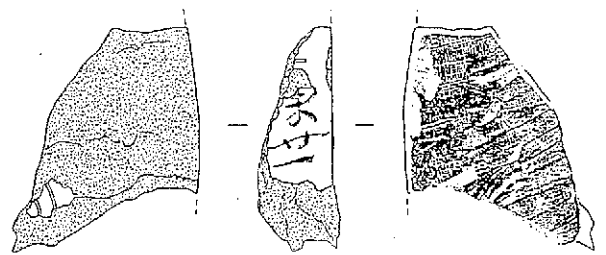


図4 三彩「山水陶器」墨書<東二一>

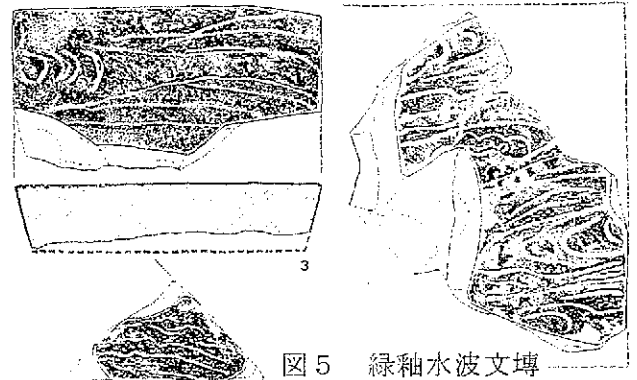
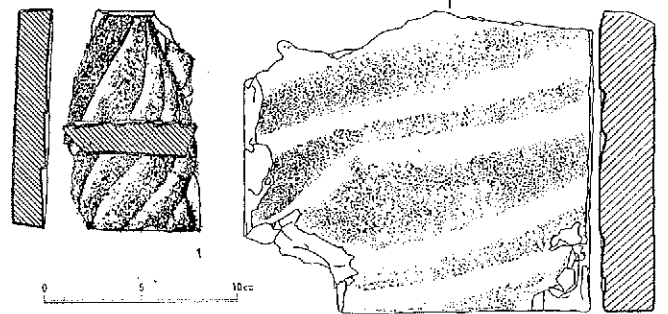


図5 緑釉水波文埴

(1川原寺 2興福寺 3~5平城京左京一条三坊)



図6 法隆寺「伝橘夫人念持仏」



い特異な遺物である。これは龍の口から灌水を吐出させる装置を構成した可能性が高い。

- ・さらに、すでに述べたことだが、三彩「山水陶器」の出土状況も、灌仏調度説に有利だ。
- ・三彩「山水陶器」は神雄寺「本堂」内や周辺平坦地からまったく出土せず、一段下の平坦面1周辺の溝から出土した。三彩「山水陶器」は「本堂」ではなく、平坦地1にあったのだ。
- ・また神雄寺「本堂」は、<sup>そぞうしてんのう</sup>塑像四天王の目に嵌め込んだガラスが溶けて流れるほどの火災に見舞われた。しかし、三彩「山水陶器」には火災に見舞われた痕跡がまったくない。
- ・つまり、三彩「山水陶器」が灌仏会に際して平坦面1で使用した灌仏調度具と考えれば、その出土状態が最も無理なく説明できるのだ。
- ・また、三彩「山水陶器」の各パーツを組み合わせる時に、その位置関係を示す数字が、<sup>こくしょ</sup>刻書「右三」「左五」と<sup>ぼくしょ</sup>墨書「東廿一」(図4)の二種がある事実も説明できる。
- ・刻書は製作時に付けた数字で、安置行為が一回限りなら刻書だけで十分だ。墨書が加わったのは、<sup>ひなにんぎょう</sup>雛人形のように安置と収納を繰り返した結果に違いない。
- ・さらに、その収納場所として平坦面1の東北隅にあるSB01の東庇を想定すれば、広場の裏面に庇をもつ特異な建築構造も容易に説明できる。
- ・そして、年1回だけ御披露目される灌仏調度であるが故に、現在なお鮮やかに釉薬が残る三彩「山水陶器」を、千年以上の時を経て、我々が目の当たりにできたと考えられる。
- ・以上、三彩「山水陶器」の形状や出土状況における諸特徴や疑問点が、これを灌仏調度具と考えることで容易に理解でき、解決する事実を指摘した。
- ・これに加えて、三彩「山水陶器」を灌仏調度と考えることにより、灌仏会という<sup>ほうえ</sup>法会(法事)および神雄寺という山寺がそなえた性格に関しても、一つの理解が得られる。
- ・灌仏会を行う旧暦4月8日は、農耕儀礼である春(初夏)の山入り行事であるという指摘が、古くからなされている[和歌森 1966]。
- ・春の山入りは<sup>よしゆく</sup>予祝儀礼の一つで、『万葉集』や記紀歌謡にある<sup>くにみうた</sup>国見歌や国ほめ歌が、山入りと深く関わる事実も指摘されている[土橋 1965]。
- ・事実、近世以降、現在に至るまで寺院で行う花祭＝灌仏会においては、甘茶を持ち帰り、墨を摺って害虫封じの呪文を書き付けるなど、<sup>よしゆくぎらい</sup>予祝儀礼的側面を今なお色濃く残す。
- ・神雄寺は背後の<sup>てんじんやま</sup>天神山からの<sup>わきみず</sup>湧水を使って、礼堂SB01を<sup>かんごう</sup>環濠状に<sup>いによう</sup>圍繞するほど水に恵まれている。神雄寺成立以前から、水源の山として信仰されていた可能性が高い。
- ・龍は、言うまでもなく水のシンボルだ。必ずしも灌仏会の主役ではない龍像を置く舞台装置＝三彩「山水陶器」は、そうした水の信仰と無関係ではありえないだろう。

- ・しかし、7寸5分の誕生仏、7寸の多聞天に比べ、脇役の龍形が倍近くの高さになると、主役の影が薄くなり、舞台効果が期待しにくい。
- ・主役の誕生仏に釣合う大きさの龍形の場合、二頭の龍の口は誕生仏の頭より高い位置にセットする工夫が必要だ。それが青龍・赤龍に対応する「山形」なのだ。
- ・事実、史料三は青龍[北山]、赤龍[南山]に対し「仏は山形二基の中間にあり」と明記する。
- ・『建武年中行事』『公事根源』は、「山形を立てて、仏の生まれた時の景色を作り、糸で落ちる滝を表わす」と記す。山形を使った宮中灌仏会は室町時代まで続いたのだ。
- ・また『宗建卿記』(江戸中期)は、古い灌仏画が描写する山形は岩のようで、仏体と樹木などがあり、山腹には龍が左右に対峙し、下方の窟内に誕生仏を安置すると述べる。
- ・宮中灌仏会で用いた山形は、二頭の龍像と不可分の関係にあったことがわかる。
- ・この山形は『延喜式』においてすでに定型化しているので、原型は9世紀後半以前の寺院における灌仏会で用いた灌仏調度具の中にあるはずだ。
- ・先述のように、灌仏調度具は8世紀南都諸寺の必需品だったが、定型化していなかった。
- ・定型化以前の灌仏調度具の一つ、そして9世紀後半以降、宮中灌仏会の舞台装置となった「龍像をともなう山形」の原型として、神雄寺の三彩「山水陶器」は有力候補となる。

#### 4. 三彩「山水陶器」＝灌仏調度説の妥当性

- ・三彩「山水陶器」の山水表現は、灌仏会の舞台装置にふさわしいだけでなく、これを灌仏調度具と考えることで説明可能となる造形や属性が少なくない。
- ・まず、線刻した魚の絵(図3)である。阿弥陀浄土變の舞台装置となる緑釉水波紋埴には、同様の魚図は皆無である。浄土の極楽池に魚が生息しない以上、当然である。
- ・三彩「山水陶器」の魚は、山から流れ来る流水に逆って泳ぐ。これはやがて龍となる鯉だ。
- ・山西省河津縣と陝西省韓城縣との間にある急流＝龍門は、鯉がこれを遡って龍となる。
- ・この登龍門の語源は『後漢書』に遡る(諸橋『大漢和辞典』7-1217頁)。
- ・山上から灌水する龍の由来を、山からの流水中に鯉で描写した神雄寺の三彩「山水陶器」は、インド・中国思想を吸収し、独自の造形とした天平文化の象徴とも言える。
- ・また、三彩「山水陶器」中央に径60cmほどの孔があり、台座を嵌め込む装置と考えられる事実も、灌仏盤を嵌め込んだと考えることで容易に解決する。
- ・径60cmほどなら、東大寺の誕生仏の灌仏盤の三分の二程度で、適当な大きさである。
- ・誕生仏以外の仏像台座を嵌め込んだ可能性も提起されるが、通常の仏像台座(須彌壇)の平面形は方形もしくは八角形で、円形例はほとんどない(例外は新薬師寺例)。
- ・灌仏盤なら円形しかあり得ず、三彩「山水陶器」に嵌め込んだものにふさわしい。
- ・また、三彩「山水陶器」以外に平坦地1を囲む溝からガラス管が出土している。類例のな

- ・奈良時代の南都諸寺は、基本的に灌仏会に必要な用具1式を保有していたのだ。
- ・また、東大寺に残る金銅製誕生仏と灌仏盤から、現在の花祭と同様、灌仏盤中央に片手挙手型の誕生仏を安置し、香水をかける礼拝方式があったことも確実である(図7)。
- ・しかし、灌仏盤に片手挙手型の誕生仏を安置する東大寺方式以外の灌仏用具もあった。
- ・宝亀11(780)年の『西大寺資財流記帳』は、所蔵仏像を列記した「佛菩薩像第三」巻で、薬師金堂にある仏像の最後に「灌仏調度」の具体的内容を記載する(史料一)。
- ・この「灌仏調度」は、仏伝に基づく釈迦誕生に関わる複数の場面を表した群像である。
- ・唐以前に漢訳された仏伝関係諸経は、釈迦誕生を、1) 出胎、2) 獅子吼、3) 灌水の3場面で構成し、釈迦誕生を造形化した石刻も、主にこの3場面からなる(図9)[松田1997]。
- ・摩耶夫人が侍女と共に藍毘尼園に行き、右手で無憂樹の枝葉を摘もうとした時、右脇から菩薩が出胎する。高33cmの「金銅摩耶夫人像」と高1m強の「金銅花樹」が対応する。
- ・菩薩は蓮華上に生まれ落ち、助けなしに七歩進み、右手を挙げて獅子吼する。「金銅釈迦仏像一軀」以下「足六双」が該当する。蓮華座を含め高30cmの片手挙手型誕生仏が、高さ12cm弱、径約9cmの六角脚台上に載るのだ。ここには灌仏盤は存在しない。
- ・残りの「捨帝釈像二軀」「捨神王像二軀」「金銅多聞天像一軀」「金銅龍形一頭」が灌水場面を構成するが、塑像の帝釈天・神王と、金銅像の多聞天・龍形は材質だけでなく、大きさが釣り合っていない。〈過去現在因果経〉や各種〈本起経〉によれば、四天王が菩薩を抱き上げて「金(宝)机上」に置き、二龍が灌水する。金銅の多聞天と龍形が対応する。
- ・一方〈仏説太子瑞応本起経〉では「梵釈神天、皆下於空中侍」とあるので、帝釈天や神王の塑像は離して置いた。灌水場面における登場者の格差を、材質や大きさで表現したのだ。
- ・古代列島の誕生仏は片手挙手型に統一されていたにもかかわらず、実際の灌仏会における用具が、それほど定型化していなかったことが、以上の分析からわかる。
- ・灌水盤の採否や、どんな群像で釈迦誕生を表現するかなど、かなり流動的だったのだ。
- ・そうした状況下で、三彩「山水陶器」も灌仏用具に採用されたと考えられる。
- ・三彩「山水陶器」の後裔は、平安時代の宮中灌仏会の舞台装置に登場する。
- ・奈良時代に寺院で普遍的に行っていた灌仏会は、承和7(840)年以降、宮中でも行うようになる(『続日本後紀』)。史料二は、『延喜式』が記す宮中灌仏会の舞台装置である。
- ・ここで二頭の龍形と深く関わる「山形」が登場する。
- ・経典が説く龍による灌水場面は、兄弟二頭の龍もしくは九龍で一頭だけの例はない。
- ・史料一の龍形は一頭だが、宮中灌仏会で登場する龍形は二頭で経典の記述と合致する。
- ・龍が灌水する姿を表現するには、龍の口は誕生仏の頭部よりも上になければならない。
- ・史料一の灌仏調度は金銅釈迦像7寸5分に対し、金銅龍形は1尺3寸で表現可能である。

- ・極楽池では、鴨・雁・鴛鴦・鶉・鶯・鶯鳥・鶴・孔雀・鸚鵡・伽陵頻迦などの鳥は、咲乱れる花や宝樹とともに極楽浄土を荘厳するが、魚は登場しない(源信『往生要集』)。
- ・事実、伝橋夫人念持仏も池や蓮葉、背後の飛天を表現しても山や魚の表現はない。
- ・これまで川原寺などで出土した緑釉水波文埴にも魚を描き込んだ例は皆無である。
- ・中国唐代極楽浄土図を継承した当麻曼荼羅にも、背後に楼閣はあっても山の表現はない。
- ・神雄寺の三彩「山水陶器」は、阿弥陀の極楽浄土を表現する舞台装置ではあり得ないのだ。
- ・さらに、東大寺福寿寺の「阿弥陀浄土変」も伝橋夫人念持仏も、臨時の仏事で組み立てるものではなく、日常的な礼拝対象となる仏像とその荘厳具(=舞台装置)という点で、神雄寺の三彩「山水陶器」とは決定的に異なる。
- ・日本の固有信仰に関わる祭祀(神道)では、季節ごとの定期的な祭事や臨時の祭事の時に、新たに祭場を設けて、その時々々に神を招き寄せることはごく一般的である。
- ・しかし、ほとんどの仏教儀式は、仏堂に安置した本尊を祈願・礼拝の対象とし、別にあつらえた特別の仏像を、臨時に使用することはほとんど無い。
- ・たとえば、古代の仏教行事で普遍的な悔過行事は、阿弥陀悔過、薬師悔過、吉祥悔過、十一面悔過など、各仏堂で祀る本尊を対象に執行する。
- ・そうした中で、特別な日に臨時に出現する唯一の仏像が誕生仏である。
- ・その特別な日は、「灌仏会」「仏生会」「竜華会」と呼ばれる。
- ・平安時代に始まる宮中灌仏会(4月8日、清涼殿で実施)においては、その舞台装置に「山形2基」が登場する(史料二・史料三)。
- ・その「山形」とはどのような形状で、何に由来するものなのか?
- ・以下これを手がかりに 三彩「山水陶器」が灌仏会の舞台装置である可能性を追究する。

### 3. 古代灌仏会と三彩「山水陶器」

- ・現在も4月8日を釈迦の誕生日として、誕生仏を飾り立て、甘茶をかける。「花祭」だ。
- ・しかし、誕生仏に甘茶をかけるのは近世以後の風習で、花祭に「山形」は登場しない。
- ・松田妙子は古代(6世紀後半～8世紀)における列島と半島の片手拳手型誕生仏66例をカウントしている[松田2001]。出土品もあるが伝世品も少なくない。
- ・しかし、誕生仏を本尊として恒常的に仏堂に安置する事例は皆無で、基本的に灌仏会(花祭)に際し、臨時の祭祀対象となるのが誕生仏なのである。
- ・『日本書紀』によれば、推古天皇14(606)年4月8日に元興寺(飛鳥寺)金堂本尊が完成する。寺院における灌仏会と孟蘭盆会(施餓鬼会)は、この年から始まったという。
- ・天平19(747)年成立の法隆寺や大安寺の財産目録は、「金泥灌仏像壺具」を記載する。

も出土していない。出土したのは、すべて一段低い「平坦面1」を囲む溝 SR01 の中だ。

- ・また、出土した三彩「山水陶器」には被災した痕跡がない。
- ・塑像四天王が涙するほどの火災で、同じガラス質の施釉陶器が無事なはずがない。
- ・つまり、三彩「山水陶器」は、須彌山を表現したものではなく、神雄寺「本堂」の本尊でもなかった。それでは、三彩「山水陶器」は、どこに置かれ、何に利用したのだろうか。

## 2. 三彩「山水陶器」を置いた場所とその利用方法

- ・出土状況を素直に解釈すれば、三彩「山水陶器」の安置場所は、府埋文センター調査の「平坦面1」もしくはその平坦面の東北に建つ「掘立柱東西棟SB01」である蓋然性が高い。
- ・しかし、三彩「山水陶器」の表面釉薬は残りが良く、「平坦面1」のような露天で雨ざらし状態にあったとは考えられない。
- ・また、SB01 は神雄寺「本堂」と身舎中軸がほぼ揃い、真北に対し約 20 度西に振っている。
- ・木津川市教委は、SB01 を「本堂」に対する「礼堂(細殿)」と推定する。妥当な解釈である。
- ・礼堂は礼拝空間なので、常時、堂内に三彩「山水陶器」を安置したとは考えられない。
- ・とすれば、三彩「山水陶器」は、普段はどこかで収納されていて、定期的もしくは臨時の仏事に際して持ち出され、その荘厳に用いた可能性が指摘できる。
- ・その収納場所として SB01 の東庇が候補となる。SB01 が上段にある「本堂」の礼堂とすれば南に庇を延ばすのは合理的でも、東庇は機能的に説明しにくい。
- ・「平坦面1」との位置関係からも、SB01 の東庇は、広場から見て裏側だ。川 SR01 を埋めて、建物裏側に庇を付けたのは、収納空間として活用するためだった可能性がある。
- ・それでは、普段は礼堂(掘立柱建物 SB01)の東庇に収納していた三彩「山水陶器」は、どのような仏事に際して組み立てたのだろうか。
- ・三彩「山水陶器」に似た遺物として、古くから緑釉水波文罍(図5)が知られており、川原寺、興福寺、東大寺二月堂仏餉屋、平城京左京一条三坊などで出土している。
- ・この使用法に関しては、神護景雲元<767>年8月30日に、東大寺上院地区にあった福寿寺阿弥陀堂の悔過行事に使用する資財を検注した記録(「阿弥陀悔過料資財帳」『大日本古文書』第5巻671-683頁)がしばしば引用される。
- ・すなわち、阿弥陀三尊を祀る舞台装置として、極楽池を表現するため緑釉水波文罍を使用したのだ。極楽浄土を表現した阿弥陀浄土変相図の立体模型版(「阿弥陀浄土変」)だ。
- ・緑釉水波文罍を敷き詰めた様子は、法隆寺「伝橋夫人念持仏」から類推できる(図6)。
- ・しかし、これらの緑釉水波紋罍は神雄寺の三彩「山水陶器」と異なり、山の表現を欠く。
- ・阿弥陀如来のいる極楽の宝池・林池を表す舞台装置である以上、山の表現は不要だ。
- ・さらに三彩「山水陶器」に描かれた魚(図3)は、およそ極楽浄土の表現にふさわしくない。

## 神雄寺と古代仏教－三彩「山水陶器」の謎を解く－

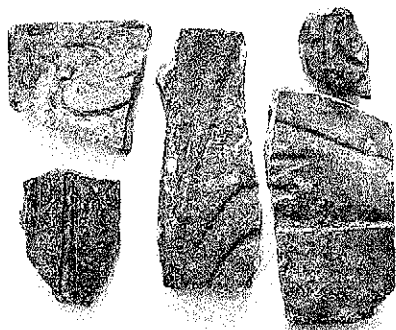
京都大学大学院  
教授 上原 真人

### 1. はじめに

- ・馬場南遺跡(神雄寺跡)において注目を集めた出土遺物として、万葉木簡以外に、1万枚近くに及ぶ灯明皿、四天王塑像、三彩「山水陶器」、三彩香炉、ガラス管などがある。
- ・なかでも三彩「山水陶器」は、形状を推測できる破片が、これほどまとまって出土した例が他になく、その用途や目的、そして神雄寺の性格を考える重要な資料を提供した。
- ・しかし、当初、これを三彩須彌山あるいは「須彌山様陶器」と呼び、のちに木津川市教委が調査した小仏堂(本堂)の本尊とする説が流布したため、その用途等について、ほとんど議論されないままになっている。
- ・以下、神雄寺跡出土の三彩「山水陶器」に関する私見を提起する。
- ・まず確認せねばならないのは、三彩「山水陶器」は須彌山を表現したものではないことだ。
- ・須彌山は仏教世界の中心にある高山(図1)で、三彩「山水陶器」のような低い山並とそこから流れ出た水波で表現される代物ではない。
- ・また、伊野さんが復元したように、山と流水で囲まれた中央に開いた径約60cmの孔に「本尊台座」を嵌め込んだとすれば(図2)、低い山並は「本尊」の背景として配されており、世界の中心にある須彌山ではあり得ない。「山水陶器」のほうがはるかに妥当な呼称だ。
- ・次に確認せねばならないことは、出土状況から判断して、三彩「山水陶器」は、木津川市教委が調査した神雄寺「本堂」に安置されていたとは考えられないことだ。
- ・神雄寺「本堂」は、桁行長16.5尺(4.9m)で背面5間、正面4間、梁間長15.0尺(4.5m)で4間の側柱のみからなる建物で、内部には13.5尺(4m)×12.0尺(3.6m)の須彌壇がある。
- ・須彌壇の側面は平瓦を貼り付けて化粧しており、周囲から等身大の四天王塑像断片、埴仏片、焼壁土、金属製品などが出土した。
- ・「本堂」は、塑像の目に嵌込んだガラスが溶けて流れ落ちるほどの火災に見舞われている。
- ・ところが、三彩「山水陶器」の破片は、神雄寺「本堂」内はおろか「本堂」が建つ平坦地から

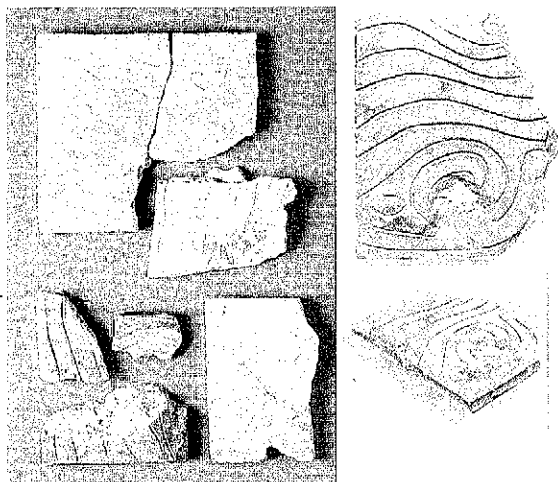


720年頃



興福寺東金堂(『都の緑釉瓦』京都市・帝塚山大学2007より)

要検討



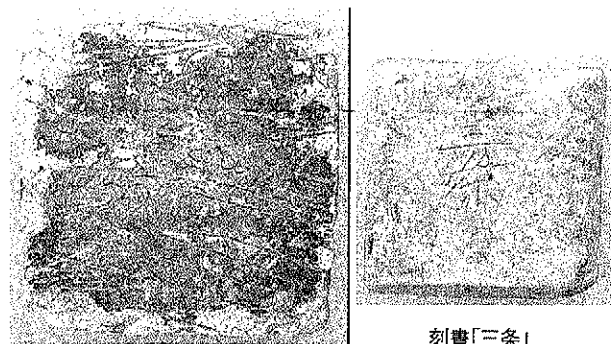
川原寺裏山遺跡(『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁資料館ほか1998と『親と子のギャラリー』奈良博2007より)

740年頃



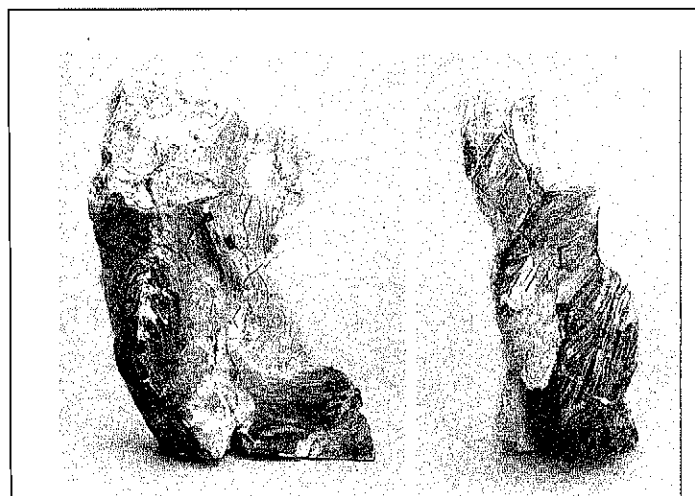
東大寺二月堂仏餉屋(『都の緑釉瓦』京都市・帝塚山大学2007より)

760年頃



伝法華寺(『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁資料館ほか1998より)

刻書「三条」



伊勢寺廃寺(『日本の三彩と緑釉』愛知県陶磁資料館ほか1998)



岩山型



岩山型



山水型



山水型

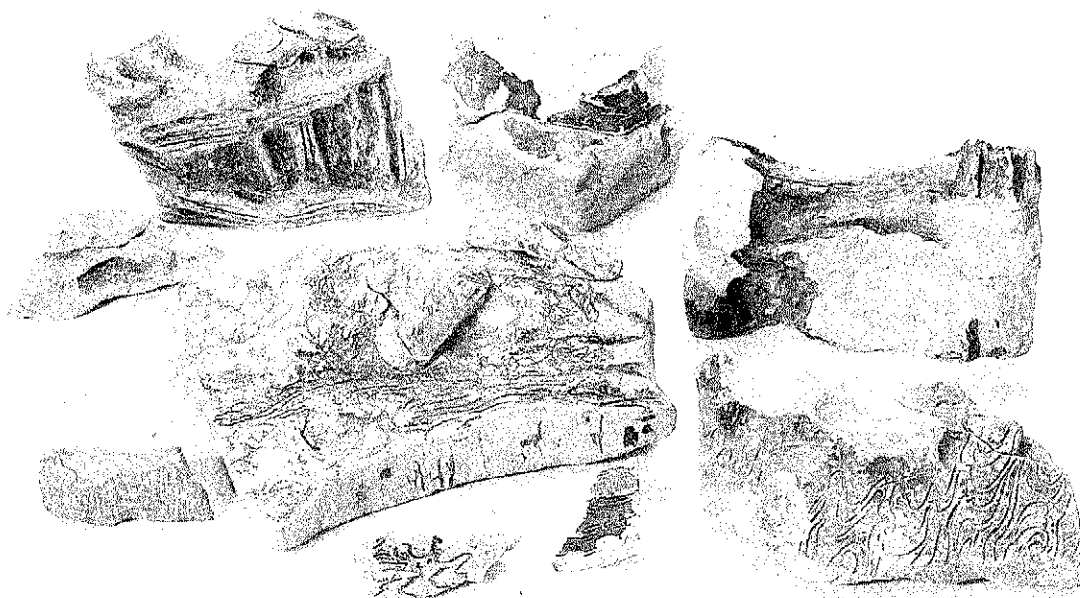


魚文

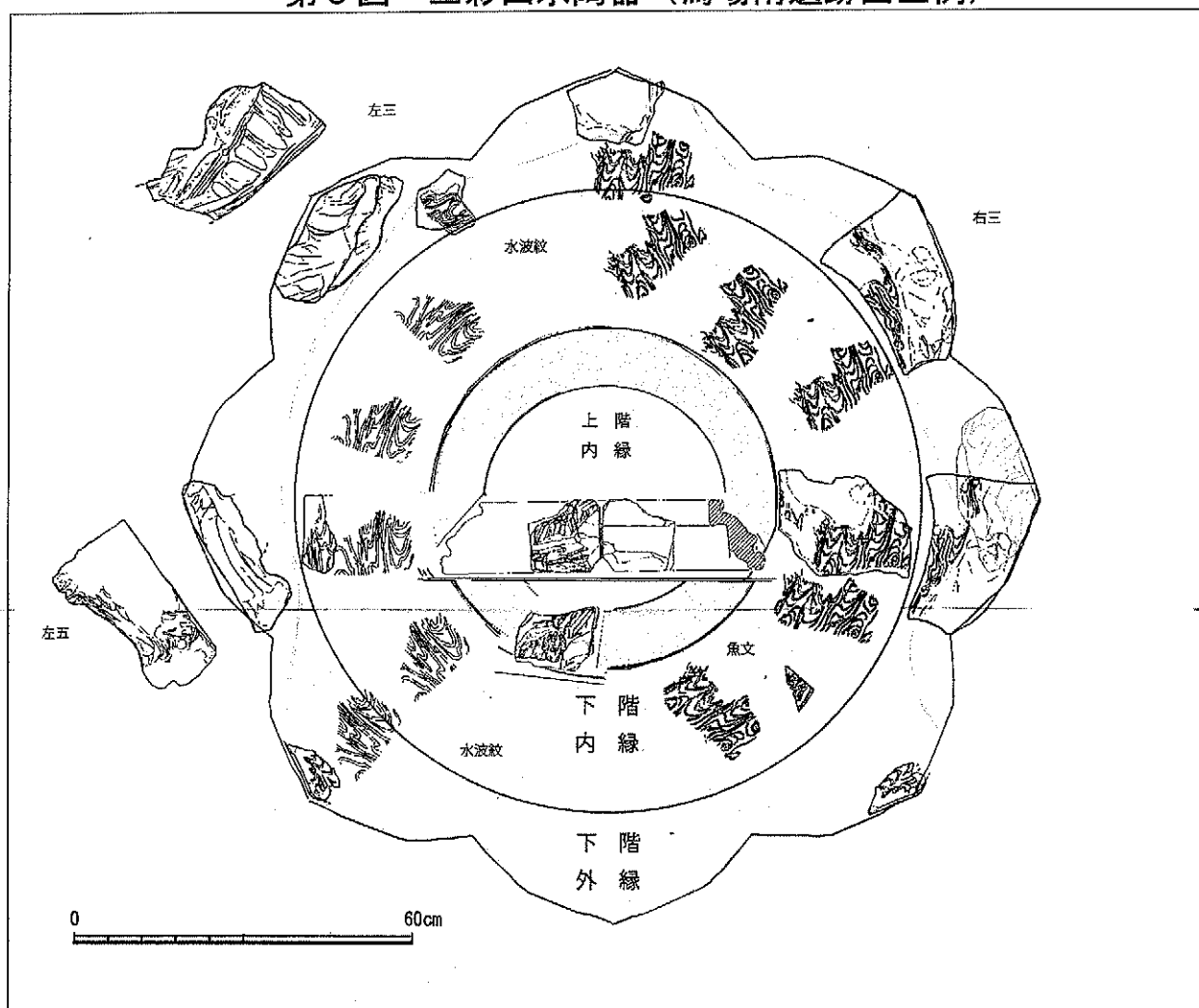
馬場南遺跡(京都府木津川市)







第9圖 三彩山水陶器（馬場南遺跡出土例）



第10圖 三彩山水陶器復原配置圖

付表3 奈良時代略年表

西暦	和暦	おもなできごと	
710	和銅3	平城遷都	奈良前期
711	和銅4	法隆寺五重塔塑像群成る	古事記・風土記
724	神亀元年	聖武天皇即位	
726	神亀3	興福寺東金堂建立。須弥壇の上面を飾っていた「瑠璃地」あり	日本書紀成立
729	神亀6	長屋王の変	
737	天平9	藤原四家（4月房前・7月武智麻呂・麻呂・8月宇合）死す 9月、橘諸兄大納言に	
740	天平12	5月、聖武天皇が橘諸兄の相楽別業に行幸 10月、藤原広嗣の乱、天皇東国巡幸（智努王が造伊勢国行宮司） 12月、玉井頓宮に行幸。光明皇后は滞在し、聖武天皇は翌日 恭仁に行幸し、恭仁宮の造営を開始（恭仁京遷都）	
741	天平13	国分寺・国分尼寺建立の詔	奈良中期
744	天平16	2月、難波宮遷都。12月、金鐘寺（東大寺の前身）および朱雀路で燈1万 坏を燃やす（燃燈供養）	聖武天皇・光明皇后によ る仏教興隆
745	天平17	平城遷都。行基、大僧正となる 天皇体調不良。京・畿内の諸寺および諸名山浄処で薬師悔過（けか）を行 う	
746	天平18	大伴家持、越中守に任じられる（6月）。751年まで（8月帰京） 天原、金鐘寺に行幸し、大仏の前で燈1万5千7百余坏を燃やす（燃燈 供養）	
749	天平勝宝元	孝謙天皇即位	この頃懐風藻の成立
752	天平勝宝4	東大寺大仏開眼供養	この頃万葉集の成立
756	天平勝宝8	太政（聖武）天皇崩御（三七の日、左右京の諸寺で誦経）	
757	天平宝字元	橘奈良麻呂の変（変が起こったのは、天平勝宝9年6月。改元は8月。）	奈良中期～後期
758	天平宝字2	淳仁天皇に譲位	
760	天平宝字4	3月、光明皇太后不調。天の神、地の神を祭り、諸社の祝部たちはそれぞ れの社で祈って、回復を願う。万年通宝鑄造 6月、光明皇太后崩御	
761	天平宝字5	光明の1周忌を法華寺阿弥陀浄土院で設けた	
763	天平宝字7	伊勢国多度神宮寺創建	神仏習合
764	天平宝字8	惠美押勝（藤原仲麻呂）の乱。道鏡の台頭	
767	神護景雲元	東院の玉殿完成。その殿舎に瑠璃の瓦を葺く	
770	宝亀元	光仁天皇即位。道鏡失脚	
772	宝亀3	伊勢国度会郡の伊勢神宮寺を飯高郡の度瀬山房に移した	
782	延暦2	宮殿・寺院の造営停止	
784	延暦4	長岡京遷都	

付表2 馬場南遺跡と周辺遺跡の出土瓦

	平城宮式瓦 の型式	城陽市			井手町			木津川市 41点				奈良山			その他				
		平川 廃寺	正道 遺跡	久世 廃寺	井提 廃寺	岡田 池瓦窯	石橋 瓦窯	恭仁 宮	高麗 寺	樋ノ 口遺跡	馬場 南遺跡	五領 池東瓦窯	押熊 瓦窯	音如 ヶ谷瓦窯		中山 瓦窯	松林 宮	薬師 寺	法華 寺
Ⅱ-1 軒 丸瓦	6311Ba									①				B			○	◎	法華寺3点、左京2-2-11 は19点
Ⅱ-2 軒 丸瓦	6308C 但し馬場南 出土資料は 鋸齒文なし						A			①				A				◎	平城京左京二条七・八坪*、 平城京左京七条一坊十六 坪1点、平城京左京八条 一坊1点、市庭古墳西北 部4点
Ⅱ-2 軒 丸瓦	6135C 系									②				A				◎	
Ⅱ-2 軒 平瓦	6572A									③								◎	平城京左京三条一坊七坪、 東三坊大路、頭塔*
Ⅱ-2 軒 平瓦	6572G									⑤								○	平城京左京三条三坊六坪*
Ⅱ-2 軒 平瓦	6681F									②		A B E S						○	平城京左京三条一坊、東 三坊大路（左京一条）*
Ⅳ-1 軒 丸	6316Dc									⑦									西隆寺、平城京二条大路 南、右京八条一坊十三・ 十四坪
Ⅳ-1 軒 丸	6012B									④								◎	羅城門*、唐招提寺*、平 城京左京三条一坊十・ 十五・十六坪、左京七条 一坊十五・十六坪
Ⅳ-1 軒 平	6768B									③	○		A B				◎	法華寺阿弥陀浄土院11点、 法華寺2点、法華寺町1点、	
奈良末以 降軒丸瓦	不明 薬師寺瓦									⑤ ②						○			薬師寺報告 fig.33-38

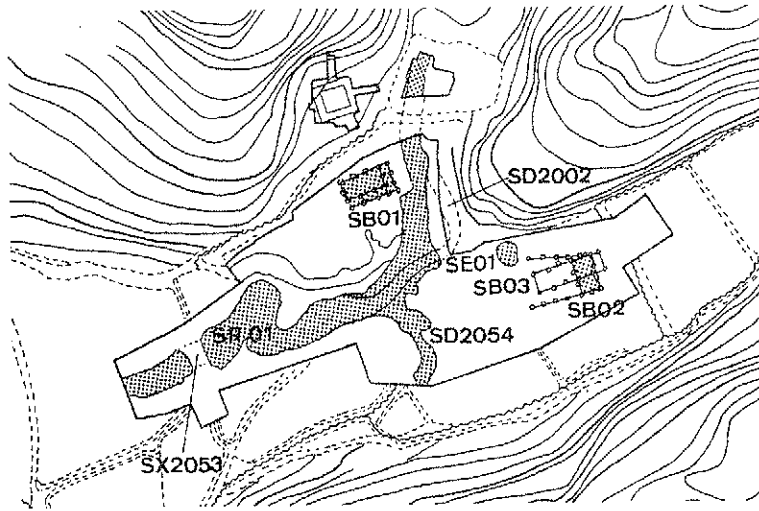
付表1 馬場南遺跡の概要

期	年代	遺物・遺構	製品など	内容	埋没時期
第1期	730年代～ 760年前後か	土師器	皿、甕ほか	生活用品	第1期
			灯明皿8000枚以上（6箇所）に集中）	法要（悔過あるいは燃灯供養）	第1期
		須恵器	坏、壺、平瓶ほか	生活用品	第1期
			灯明皿若干	法要（悔過あるいは燃灯供養）	第1期
		彩釉陶器	ほとんどこの時期か 火舎型香炉、塔鉢（とうまり）蓋、浄瓶、托	仏教関連遺物	第2期
		彩釉山水陶器	山や水波紋	仏教関連遺物	第2期
		墨書土器	「浄」	法要（悔過あるいは燃灯供養）	第1期
			墨書人面土器	祭祀関連か	第2期
		銭貨など	和同開珎、ガラス製細管状製品	法要（悔過あるいは燃灯供養）	第1期
		瓦	軒丸、軒平	平城宮式（同範）Ⅱ期。恭仁宮造営前後。 建物の一部だけに葺く	第2期
塼の一部	使用場所不明		第1期		
施設	掘立柱建物SB01・SB02	主殿と雑舎（方位は北20度西）	第2期・第1期		
第2期	760年前後 ～780年代	土師器	皿、甕ほか	生活用品	第2期
			灯明皿2000枚程度か（2箇所）に集中）	法要（悔過あるいは施設廃棄時）	第2期
		須恵器	坏、壺、平瓶ほか	生活用品	第2期
			灯明皿若干	法要（悔過あるいは施設廃棄時）	第2期
		彩釉陶器	第1期に続き使用		第2期
		彩釉山水陶器	第1期に続き使用		第2期
		墨書土器	「神雄寺」、「神尾」、「神」、「寺」 「大殿」、「口橋寺」、「悔過」	習書、供給場所の明示などか 「大殿」土器自体は第1期	第2期
		銭貨	萬年通寶		第2期
		瓦	軒丸、軒平	平城宮式（同範）Ⅳ期 建物の一部だけに葺く	第2期
		建築部材	卷斗（小型）	小型建物に使用か	第2期
		木簡	歌木簡	770年頃までに埋没（土器編年平城4期まで）	第2期
		施設	掘立柱建物SB01・03	この時期、SB01の庇増設か	第2期

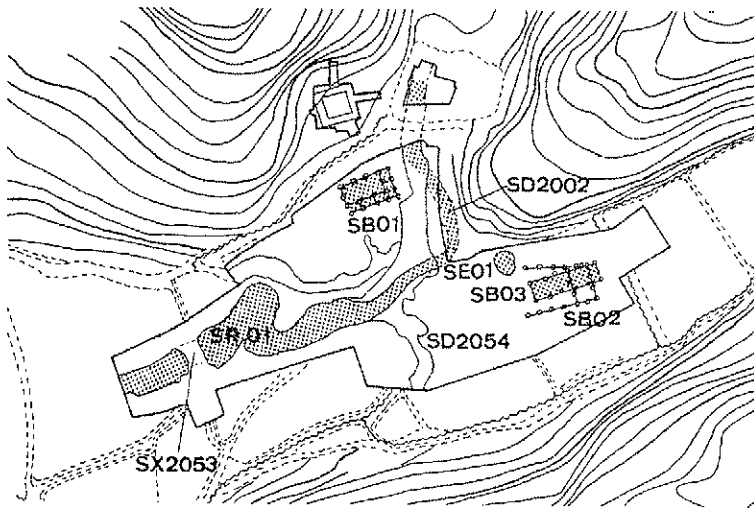


第8図 出土遺物実測図

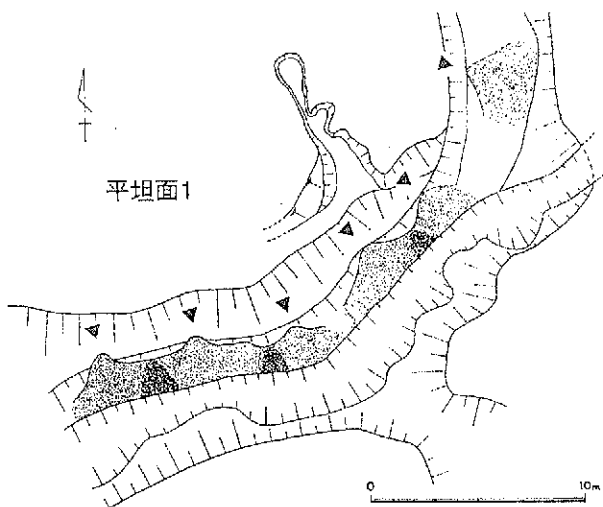
1. 三彩蓋 2. 緑釉塔碗蓋 3・8. 三彩火舎型香炉 4. 三彩托 5. 三彩壺 6. 三彩浄瓶  
 7. 三彩水瓶 9. 万葉歌木簡 10. 須恵器鼓胴 11. 卷斗 12・13・16. 平城宮式軒丸瓦  
 14・15・17. 平城宮式軒平瓦 18~22. 彩釉山水陶器



第4図 奈良時代中期の建物と川の様子



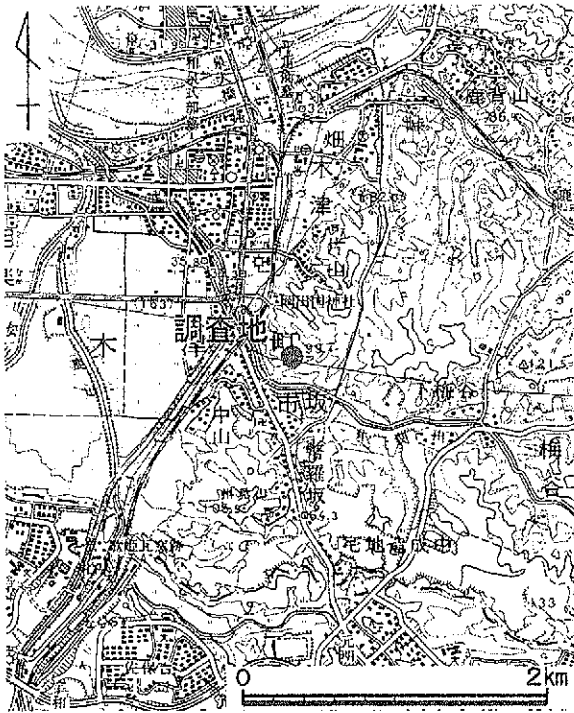
第5図 奈良時代後期の建物と川の様子



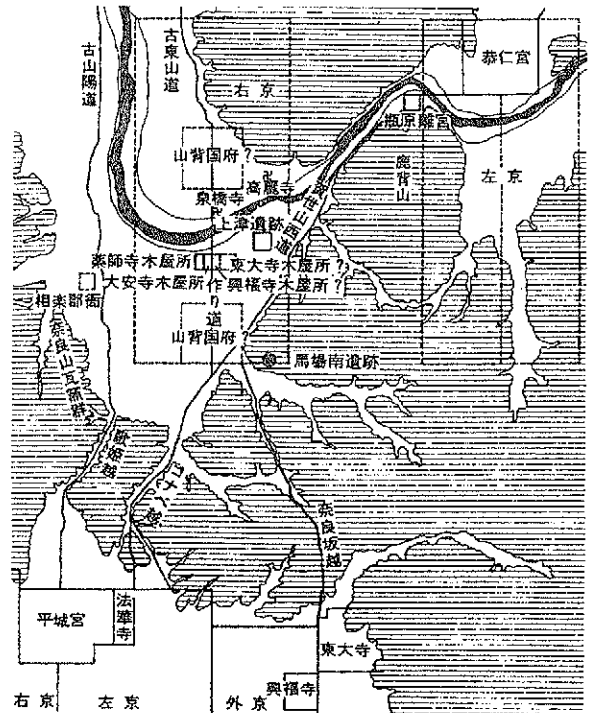
第6図 灯明皿集中箇所 (▲印)



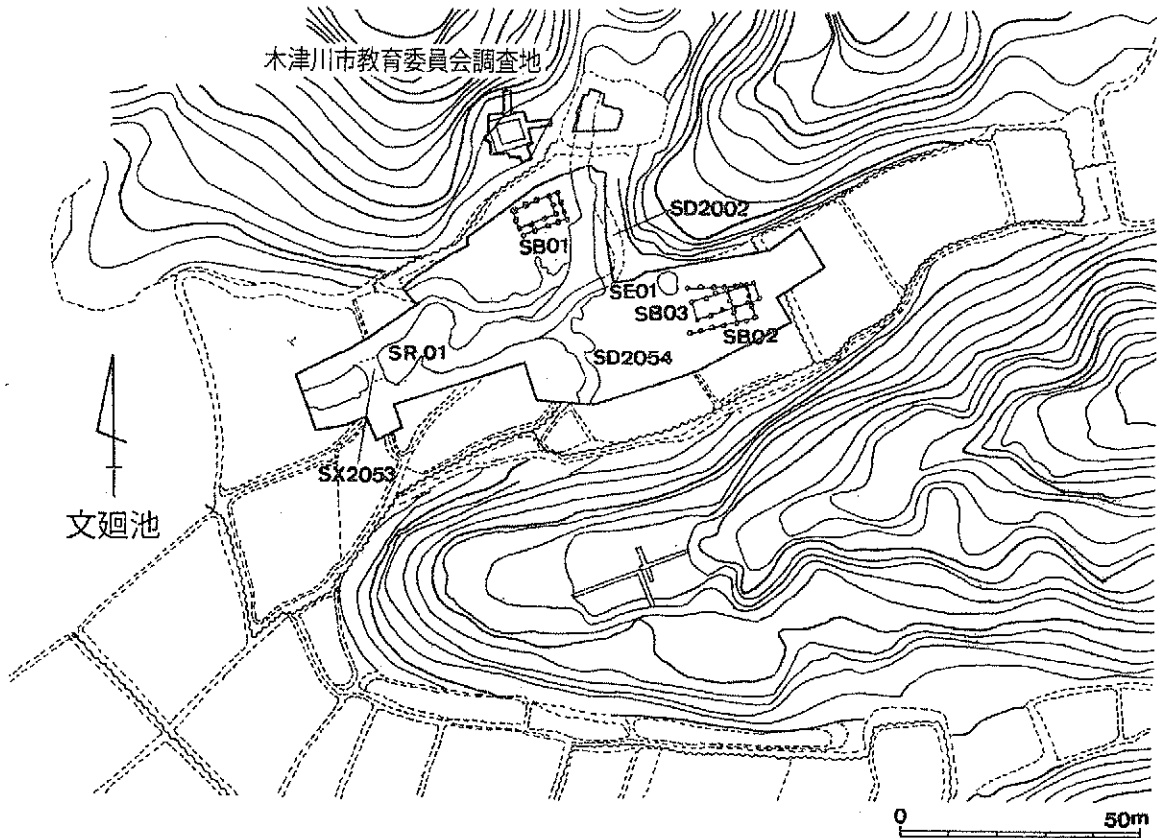
第7図 灯明皿検出状況 (西から)



第1図 調査地位置図  
(国土地理院 1/50,000 奈良)



第2図 平城京と調査地  
(『上津遺跡 木津町報告』第3集に加筆)



第3図 馬場南遺跡調査遺構配置図



像できる。今回ほどまとまって出土したのは全国で初めてである。現地説明会資料には須弥山様陶器しゅみせんようとうきとして報告したが、これらの製品を文献に見える阿弥陀浄土變あみだじょうどへんの瑠璃地るりじや池敷とする意見（高橋照彦氏）もあり、今回は山や水をイメージした製品では意見は一致しており、施釉山水陶器として報告した。奈良時代中葉の東大寺二月堂がっしょうのや仏餉屋出土例と似ており、時期は8世紀中葉と考えられる。

⑤墨書土器ぼくしょどきに「大殿」がある。この用語は大きな建物という意味から転じて、それらを使用する天皇や大臣クラスの人物を指すので、これらの人物と深く関係していた可能性がある。

⑥万葉集が書かれた木簡が出土したことは、あるいはこの地で歌会うたかいがおこなわれたこと（上田正昭氏）を窺わせる。歌1首が1行に書かれていたとすれば、60cmを超える長大な木簡もつかんと推定できる。今回の例は歌会用に作成された可能性が高い（栄原永遠男氏）。万葉集は全20巻のうち16巻までが746年から数年の内に編纂へんさんされたといわれており、木簡が埋没した時期に近く、万葉集成立期の状況を知る上で重要な資料になった。

なお、歌木簡の裏側にも、判読しにくいものの、「越中守カ」と読める文字が書かれていることがわかった。

⑦この遺跡の成立時期の天皇である聖武天皇しょうむてんのうや光明皇后こうみょうこうごうを筆頭に、当時活躍した橘諸兄たちばなのもろえ（約10年間1人だけで大臣を務めた）や橘奈良麻呂たちばなならまる、藤原四家との関連が注目される。

⑧出土遺物は瓦や三彩陶器などで、寺の存在を連想させる。神雄寺という寺があったことも確実である。しかし、瓦は平城宮式のものがほとんどで、この点から言えば寺との関連は希薄である。「大殿」という墨書も、東大寺大仏殿を指した例はあるものの、通常は寺とはあまり関係がない。

また、掘立柱建物が3棟、礎石建物1棟という構成も、寺だけではなく、たとえば貴族の別荘や離宮などの施設の存在を示しているのかも知れない。遺構の状況から、2時期に分けられることから、この点に留意して検討したい。

さて、万葉歌と寺や僧は一見結びつかないようにみえるが、万葉集の中にも寺で貴族たちが音楽を演奏し、歌を詠んだ例（巻6、1594番）があり、また、沙彌滿誓さみのまんぜいなどの僧も歌を詠んでいる（巻2、391番）。

おわりに

以上、馬場南遺跡の調査成果は考古学をはじめ、古代史、万葉集研究を筆頭とした国語・国文学など幅広い分野に影響を与えることは確実である。ここに、調査によって知り得た事実を報告して、中間のまとめとしたい。

## 馬場南遺跡の調査成果

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
次席総括調査員 伊野 近富

### 1. はじめに

馬場南遺跡は、京都府木津川市大字木津小字糠田<sup>ぬかた</sup>に所在する。平城京<sup>へいじょうきょう</sup>の北約5kmにあたる。

近くには奈良時代の幹線道路である北陸道<sup>ほくりくどう</sup>が通り、木津川沿いには「泉津」があり、全国からの物資の集散地があった。また、恭仁宮<sup>くじきみやう</sup>にも近い。

### 2. 今回の調査で判明したこと

①川跡SR01の縁辺に掘立柱建物跡<sup>ほったてばしらたてももの</sup>3棟が点在していたこと。また、同時に建てられたのは2棟程度であることがわかった。時期は土師器<sup>はじき</sup>や須恵器<sup>すえき</sup>から、奈良時代中期から後期（8世紀中期から後葉）である。

また、木津川市教育委員会の調査で、SB01の北約10mの地点で、小規模ながらも建物構造が極めて珍しい礎石建物<sup>そせきたてももの</sup>1棟が確認された。

②川SR01は、長さ100mほど確認した。出土遺物の多くは土師器皿で8千枚ほどを数え、その多くが灯明用<sup>とうみょう</sup>で、川の北岸に埋没していた。おそらく、ここで何らかの法要<sup>ほうよう</sup>がおこなわれたと想定できる。一度川は護岸のため、直されたようであるが、その後埋没したようである。新しく溝SD2002が掘られ、2か所で多量の灯明皿が確認できることから、法要のあったことがわかる。なお、奈良時代の文献には燃灯供養<sup>ねんとうくよう</sup>という表現もある。これは、たとえば寺の中心施設のまわりに灯明を灯すものである。これとの関係も注目される。

③墨書土器が出土したことから「神雄寺」「神尾」と呼ばれる寺が存在したことがほぼ確実である。しかし、奈良時代の文献には記載がなく、新発見の寺である。寺関係の墨書土器は奈良時代後期の土層から出土した。

④緑釉陶器<sup>りよくゆうとうき</sup>や三彩陶器<sup>さんさいとうき</sup>の質、量は全国でも屈指である。特に、施釉<sup>せゆう</sup>された山水陶器<sup>さんすいとうき</sup>の出土地はほとんどが平城京内の大寺院で、国家あるいは貴族の持ち物であったことが想



(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどは、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) FAX (075) 922-1189